

当院で分離された β 溶血性連鎖球菌の検出状況と薬剤感受性推移

◎井上 由美¹⁾、湊 水希¹⁾、上田 真美¹⁾、伊藤 将大¹⁾
社会医療法人財団白十字会 佐世保中央病院¹⁾

【はじめに】 β 溶血性連鎖球菌は突然的に発症して急激に進行し、重篤な侵襲性感染症を引き起こすことがある細菌の一種である。いずれの菌種もペニシリン系抗菌薬に良好な感受性を示し、第一選択薬として用いられることが多いが、近年 *Streptococcus agalactiae* のペニシリン低感受性株の出現が報告された。また、マクロライド系・キノロン系抗菌薬に対して感受性低下を指摘する報告もあり、感受性率の動向を把握することは重要である。今回、当院における β 溶血性連鎖球菌の検出状況と薬剤感受性結果について調査を行ったので報告する。

【対象と方法】 2020 年 1 月 1 日から 2024 年 12 月 31 日までの 5 年間で分離された β 溶血性連鎖球菌を対象とし、検査材料別に検出数を調査した。また、菌種別に薬剤感受性検査結果について解析を行った。薬剤感受性検査は DxM マイクロスキャン Walkaway(ベックマンコールター社) を用い、感受性パネル MicroScan MF7J を使用した。

【結果】 5 年間を通して検出数は *S. agalactiae* が最も多く、 β 溶血性連鎖球菌の 7 割を占めた。次いで G 群溶連菌が

多く検出された。いずれの菌においてもペニシリン系抗菌薬の感受性率は 100% となり、良好であった。マクロライド系抗菌薬に対しては、*S. agalactiae* と G 群溶連菌の耐性率が増加傾向となっており、2024 年には *S. agalactiae* で 39%、G 群溶連菌で 50% となった。キノロン系抗菌薬に対しては *Streptococcus pyogenes* および G 群溶連菌で大きな変動はなかったが、*S. agalactiae* においては耐性率が増加傾向であり、2024 年には 52% となった。

【考察】 今回の調査によって、当院の β 溶血性連鎖球菌に対するペニシリン系抗菌薬の感受性は、良好な状態を保てていることが分かった。しかし、*S. agalactiae* のマクロライド系・キノロン系抗菌薬感受性率の低下および、G 群溶連菌のマクロライド系抗菌薬感受性率の低下が認められた。今後も薬剤感受性の動向を注視し、アンチバイオグラムの作成や情報提供を行うことで抗菌薬適正使用に結び付けていくべきと考える。

【連絡先】 0956-33-7151(内線:1184)